

ウーマン・イン・スポーツ 各紙掲載記事より

94年5月〜10月

●94年5/20(朝日夕刊)女子プロ

テニス天才少女を守れ バルセロナ五輪の金メダリスト、ジュニアファ・カプリアティ(18)は米国が麻薬所持の疑いで逮捕された。十三歳でプロに転向し、最年少記録を次々に塗り替えたカプリアティだが、使い過ぎた右ひじの痛みが九十二年の五輪優勝後から悪化。九十三年の全米オープン初戦敗退を経験し、練習への意欲を失い、家を出た。

児童たちが幼くして世界のひのき舞台上に躍り出て、その後低迷、脱落する例は後をたたない。女子テニス評議会は「十四歳以上」と定めているツアー参加年齢の見直しに入った。

●6/1(西日本共同)米国は男女不平等の国? 女子のソフトボール選手は、頭から血を流すけがをしているのに二十分も床に放置されていた。女子体操選手は、男子バスケットボール部のボールが飛んでくるのを避けて練習しなければならなかった。米国を「男女同権の国」と思ったら、大間違い。米ペンシルバニア大の女子スポーツ選手とコーチ陣は、大学当局の男女差別政策に抗議し、女性の権利獲得に

向けて戦っている。

男女間格差を問題とした訴訟は、最近増え、過去三年間で四十件近くに達する。

●6/17(産経共同)FIFA功労賞―受賞者に初の女性 国際サッカー連盟(FIFA)の総会が十五日にシカゴで開催。日本女子サッカーリーグでプレーするノルウェー代表のグン・ニイボルグが女性で初めてFIFA功労賞を受賞した。

この賞は二年に一度、世界のサッカー界に貢献をした人物を表彰する。ノルウェーの代表として百十試合に出場、女子サッカー普及に尽力したことが評価された。

●9/8(報知)J目指す女子サッカー、プロ化へ着々 スタンドでは閑古鳥が泣いている状態の女子サッカーに、(財)日本音楽事業者協会が全面的に協力し、ファン層拡大にひと役買うことになった。日本女子サッカーリーグは将来のプロ化を目指し、「リーグ」という愛称がつけられた。キャンペー

の柱はイメージソング。リーグに所属する十チームのイメージソングを傘下のプロダクションが作成、それを人

気歌手が歌ってCDとして販売する。

またスタジアムでコンサートをを行い、その後に「リーグ」の試合を行うなどして観客を動員するプランもある。このキャンペーは来月から開始し、一気に盛り上げていく構えだ。

●9/24(報知)女子マネ今秋ベンチ入り 来年七十周年を迎える東京六大学野球リーグに、史上初めて女子マネージャーが「出場」する。明大野球部マネージャー・桑(くめ)知代子さん(20)で来月十日の秋季開幕戦、明大―東大にベンチ入りすることが二十九日に明らかになった。

今春、女子に門戸を開放した同リーグ。「ウーマンパワー」が一気に神宮を席けんしそうだ。

●9/24(朝日夕刊)目覚めてプロ化へかける この夏、女性たちが激しく自己主張した。テニスの伊達公子、元JOC職員の大林素子(27)は日立も。

プロ契約を求める選手の先頭になった「モトコ」は、「バレーを職業としたいんです。金銭は二の次。それが、日本のレベルアップにつながると思う。今のままではダメ。けがしたって、お

給料は普通にもらえる。大活躍する有名選手も、試合に出ないボール拾いでっ

て同じお給料。ハングリー精神を持って、もっと食欲にならないと向上しないでしよう」と、プロへのこだわりを語った。

●10/4(産経)中国パワー全開 始まったばかりのアジア大会で、いきなり、世界新記録ラッシュだ。中国の女子重量挙げの圧倒的強さ。コーチは「奮励努力の結果だ」と胸を張る。週に九度、三―五時間の練習を強化してきた。

●10/20(読売夕刊)もうオマケなんて言わせない! 十四日の東京・後樂園ホール。キックボクシングでは初めて、女子による全日本大会が開催された。観客席はほぼ満席。関係者も今後に向けて、手ごたえを感じたようだ。

この日のメインイベントのWKA世界ムエタイフライ級タイトルマッチで欧州チャンピオンを一ラウンドKOした熊谷直子選手は、「これまで女子は男子試合のおまけ。今日が女子キックのスタートの日。ここまでやれるというところを見てほしい」と話した。